

永楽宮は陝西省戸県の重陽宮と北京の白雲観と共に中国道教全真教派の三大総本山の一つとされています。現在は山西省南部の芮城ぜいじょう県城北の竜泉村にありますが、もともとは黄河の北岸に近い山西省永済市永楽鎮にありました。黄河の三門峡ダム建設工事に伴う水没を避け、中国政府によって1959年から1965年の6年の歳月をかけて現在の地に移築されました。

永楽宮は道教八仙の一人「呂洞賓」を記念するために建てられた道教寺院です。呂洞賓は唐の貞元中(785～805)に蒲州(山西省永済市永楽鎮)に生まれました。呂洞賓は民間ではとても人気があり、各地に主神として祭る廟も多いです。全真教の開祖・王重陽に金丹道の秘伝を伝授したという説話から、全真教では特に重要視されています。

500mもの長さの中軸線上には、宮門、龍虎殿、三清殿、純陽殿、重陽殿など五つの建物が並んでおり、清代に建てられた宮門以外は全て元の時代に建てられました。この中では三清殿が一番大きく、中に道教の創始者老子を祭っているのが永楽宮の本殿となります。殿内真ん中には老子の化身像が祭られています。東から順番に玉清元始天尊、上清靈宝道君、太清太上老君と呼ばれているので

「三清殿」と名付けられたのです。

■主な石窟

殿内の四方の壁一面に神々が道教の始祖である元始天尊を礼拝する姿を現した有名な壁画「朝元図」があります。高さ4m、長さ95m、面積400平方メートルあまりの大きさです。

壁画の内容は、天や各地から数百の神々が手に笏を持ち、足に瑞雲を踏み、一斉に集まり元始天尊に拝謁する場面です。描かれた当時(元代)に流行っていた厳かな雰囲気構図形式です。8体の帝后主神とその従属たちはそれぞれ東、西、北の壁に描かれていて、真ん中に位置している「三清」の塑像に対して礼拝しています。南壁の東側には青龍、西側には白虎が描いてありますが、中に向いていますから入り口の守り神ではなく、礼拝者の先頭にあたります。

東壁には玉皇大帝、后土大帝とその周りの山や川などの神々が描かれていて、道教では人間の運命と関わりがあります。西壁には木公大帝、西王母大帝とその周りの太乙¹⁾神、雷府八部の神々が描かれていて、魔除けや豊作、安楽の役を司ります。北壁には紫薇^{しび}大帝、句陳大帝とその周りの星辰諸神つまり二十八宿、北斗七星、南斗六星と日月五星



元始天尊を礼拝する姿を現した有名な壁画「永楽宮壁画朝元図」。



〔左〕西王母 〔右〕蒼頡^{そうけつ}。

(埼玉県山西省友好記念館所蔵品、永楽宮壁画模写絵画より)

などを描いています。身長2mを越える神々が四層に分かれて順番に「三清」を礼拝しています。全体がバランス良く構成されています。

もう少し詳しくご説明をします。北壁に描かれている紫薇大帝の前には光輪を被って青い衣を纏い、髭の生えていない若者は北斗七星、その左に金、木、水、火、土の五大惑星が並んでいます。前で金色の光輪を被っているのは太陽神、銀色の光輪を被っているのは月の女神です。月の女神の上で首に蛇を巻き付けている少女は水星で、水星の傍らにおちょぼ口をして琵琶を抱き、豊満な体つきでかましているのは金星で、金星の下にお盆をもっているのは木星です。大地を踏んでいるのは土星です。手に武器を持ち、怖い顔をしているのは火星で、一番上で首に緑のリボンを結んでいるのは帚星と呼ばれています。この帚星は60年に一度現れ、人間に災難をもたらすと言われて

います。西壁に描いてある木公と西王母は夫婦で、木公は男の仙人を、西王母は女の仙人を管理しています。西王母は帽子に「坤」という字を書いて、柔らかな陰を表しています。西王母の手前にいる青い衣を着ている太乙^(注)は「朝元図」の中で最も色彩が

鮮やかです。太乙が手に笏を持ち、足に瑞雲を踏み、舞っている姿はゆっくりと西王母の方へ歩いているように見えます。西王母の手前の玉女は「朝元図」の中で表情が最も豊かです。眉が逆さの『八』の形で、何か心配事が有るように見えます。

帝王や後の姿をした主神8体を囲んでいる約286体の従属神の群像はそれぞれが異なる286の表情があります。古

代の画家達は唐、宋以来の絵画の書き方を継承して、元代の特徴をも取り入れて「朝元図」を完成したのです。人物を描く線は流れるように滑らかで、元代の壁画の中で貴重なものです。

■注

1) 太乙(たいいつ)：太一とも言う、古代中国における宇宙の根元を表す哲学的概念、または天の中心に位置する星官(星座)、またはその神格。

(ウィキペディアより)

2) 蒼頡(そうけつ)：漢字を発明したとされる古代中国の伝説上の人物。蒼頡伝説の主流は四眼のようで、古代の神様を描いた本では四眼で登場しています。時代が下ると誇張され、六眼のバージョンも登場してきました。永楽宮は元代の創建で、建物のひとつが永楽宮であるため、壁画に描かれた蒼頡も全真教にとって最先端の姿、六眼で描かれたのかもしれない。

(埼玉県山西省友好記念館神怡館、神林直樹氏)

国際交流員として2004年から2年間、青森県に来日した鄧仁有さん。その後帰国され、山西省太原市にある旅游学院の日本語ガイド養成コースで教鞭をとられています。これから数回、鄧さんが執筆した日本語ガイド資格試験用テキストから、山西省の名所旧跡をご紹介します。